2017 年春　日消連の連続講座

これ知らなくちゃ！見て・聞いて・食のいま

講演記録集

特定非営利活動法人　日本消費者連盟

ＴＰＰは頓挫しても、食べものの多くを海外に頼る私たちの暮らし。誰がどんなふうに作っているの？安ければいいの？　世界で起きている食の現実(いま)を、日本消費者連盟の運営委員である講師陣が、関連映画とともにわかりやすくお話しした「2017年春の日消連の連続講座」。大変好評につき、このたび講演に大幅な加筆・修正を行い、講演記録集を作りました。

２０１７年６月

目　次

【遺伝子組み換えと食】

GM作物は食の安全を脅かしている……1

天笠　啓祐（遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン代表）

【農薬問題と食】

アジア農薬事情と日本の食―ネオニコ問題を中心に―……20

田坂　興亜（アジア学院理事）

【自由貿易と食】

土・人・むらから問い直す自由貿易……36

大野　和興（農業記者）

【遺伝子組み換えと食】

ＧＭ作物は食の安全を脅かしている

天笠啓祐（遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン代表）

保護主義の台頭と多国籍企業

遺伝子組換え作物の栽培が本格的に始まったのが 1996 年、97 年の 1 月頃から日本に入ってきて、ちょうど 20 年目の今日、どういうことが起きているかということをお話したいと思います。

まず、アメリカのトランプ政権の誕生が食にどういう影響を及ぼすかということですが、日本の国会で TPP が批准されたわけですが、これは非常に大きな問題です。なぜかと言いますと、これから日米の間で貿易交渉が始まろうとしているわけです。そのとき、国会で批准した TPP の条件が前提になる可能性が高い。国会で批准した後だから、TPP の内容を前提に、さらにそれにプラスして、アメリカの都合に合わせた形で上乗せした要求が出てくる可能性が、極めて高くなってしまった。ですから国会で承認したということは、非常に大きな問題だと思っております。

自由貿易競争って、いったい何だろうか。わたしはいつも 100 メートルの徒競走に例えています。経済の国境の壁をなくすということは、同じスタートラインで皆さん競争しましょうということになるわけです。オリンピックの金メダリストも、障害を持った方も、赤ちゃんもお年寄りも、みんな同じラインでスタートしなければならなくなるわけです。そうすると、勝つ人はおのずと明らかなのです。金メダリストに勝てるわけがない。金メダリストが、食の分野でいえばモンサントのような企業になるわけです。大企業、多国籍企業。強い企業が金メダリストなわけです。そういう強い企業がさらに強くなるという、こういう仕組みが自由貿易なわけです。

ジャーナリスト。雑誌「技術と人間」編集者を経て、現在、日消連代表運営委員、遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン代表。著書に『遺伝子組み換え食品入門』（緑風出版）、『TPPで暮らしはどうなる?』（岩波書店）など。

いま格差社会が広がっておりますが、多国籍企業の支配が強まることで、金持ちはより金持ちになり、貧しいものはより貧しくなる。それがさらに進めば、当然世界中で反発が強まる。いま、世界の 10 人の金持ちの総所得と、30 億の貧しい人の所得が同じだと言う。それほどの格差社会ですから、反発が強まるのは当然で、これがイスラム圏などで激しい原理主義やナショナリズムの昂揚などになっていく。

トランプ政権は「アメリカ・ファースト」と言って、一方で自国の利益を最優先しながら、自由貿易交渉をやろうというのですから、考えてみたらでたらめです。それほど経済的に追い詰められているわけですから、何を要求してくるかわからない。そんな中、安倍政権はアメリ

【農薬問題と食】

アジア農薬事情と日本の食

―ネオニコ問題を中心に―

田坂興亜（アジア学院理事）

フィリピンのバナナに大量の農薬使用

オルタ・トレード・ジャパン（ATJ）という団体がありまして、フィリピンで無農薬バナナを栽培して、それを日本に輸入している団体です。そのATJの要請で、昨年の９月、ミンダナオ島に行ってきました。その周辺で、ドールとか、住友企業系のスミフルがやっているバナナ農園があり、農薬の空中散布を行っていました。日本で輸入されているバナナは、オルター・トレード・ジャパンを通じて生協などから無農薬のものを入手しない限りは、ドールやデルモンテ、スミフルなど、農薬をたくさん使っているバナナということになります。エクアドルの無農薬のバナナなども少しは見かけますが。

農薬は、子どもたちへの影響がやはりいちばん心配されます。バナナ農園では青い袋がバナナ全体にかぶせてあって、この袋の多くには有機リン系殺虫剤のクロルピリフォスが染み込ませてあると説明されました。それからピレスロイド系の農薬も使われています。日本で使われている蚊取り線香のほとんどは合成のピレスロイドです。昔は、除虫菊という菊を使っていたのですが、現在の蚊取り線香のほとんどが合成です。その仲間であるビフェンスリンが染み込まされているものもあるようです。また、殺菌剤が染み込ませてあるという説明をする人もいました。

このクロルピリフォスというのは、アメリカの環境保護局（EPA）が、子どもの健康への影響が大きいとして、使用を禁止しています。日本

PAN(国際農薬監視行動ネットワーク)アジア・太平洋日本代表。元国際基督教大学(ICU)教授。元アジア学院校長、現在同理事。日消連運営委員。著書に『アジア輸入食品汚染』（家の光協会）、『危機に立つ人間環境』（光村図書）など。

ではダースバンとかカヤタックとかシロアリピリフォスといった商品名で、家庭用殺虫剤として広く使用されています。(旧)東京衛生研究所は2012年に、フィリピンから日本に輸入されたバナナに多くの農薬が検出されたという報告をしています。とくにクロルピリフォスというのは、かなりいろいろなバナナから検出されています。

それから、ネオニコチノイドも、2013年に初めて検出されています。highly hazardous pesticide（HHP＝高有害物質）は、わたしが日本代表として出ている国際農薬監視行動ネットワークが、いくつかの農薬を指定して国際機関などに使用停止にすることを呼びかけているものです。根拠は、EUやアメリカの政府機関、WHOなどで発がん性や子どもへの影響を指摘されている、ということです。まだ禁止されているわ

【自由貿易と食】

土・人・むらから問い直す自由貿易

大野和興（農業記者）

日刊ベリタ編集長、国際有機農業映画祭代表、アジア農民交流センター世話人、TPPに反対する人々の運動世話人。日本とアジアの村を歩く。著書に『日本の農業を考える』（岩波書店）など。

1、農業と自然の関係

百姓は身の内に宇宙をもっている

「根の国」という映画の中で、土１グラム、小さじ１杯に数千万の微生物がいるという言葉が出てきます。これは実は曖昧な数でして、いろいろな文献を読んでみると、数千万、２億から３億という数字もあれば、一番多かったのは、世界的な土壌微生物学者が語った「人類の数くらいいる」というものでした。当時世界の人口は40億から50億でしたから、それくらいいる。その中で、名前や役割が解明されているものは、１～２％くらいしかない。土１グラムの中に、一種の宇宙があるということが言えると思います。

僕は村で生まれ育って、村歩きを仕事にしていますが、もう40年ほど前になる30代の頃、取材で岩手か秋田のある村に行きました。列車を待っている間、時間をつぶすために公民館に入ったら、村の人の文集がありまして、拾い読みしていたんです。すると短歌のページがあって、その中にお年寄りの百姓が書かれた、すごい歌がありました。それは、百姓は身の内に宇宙を持っている、という歌なんです。農民は土地を持っている、その土地は自分にとっては宇宙だという意識で書かれているんですが、「根の国」の映像と重ね合わせますと、土の中に宇宙があり、それは身の内の宇宙と重なる。二重三重の、無数の宇宙の世界に百姓は生きているのだと、今あらためて思っています。

「土地ではなく土だろう」

５月に日本消費者連盟が開くシンポジウムでは、三里塚の百姓である石井恒司さんに来てもらいます。石井さんは18歳で三里塚闘争をはじめて、何度も何度も刑務所にぶちこまれながら、今も百姓をしながら土地を守っている。彼が20代初めの頃、『壊死する光景』という、三里塚の若い百姓が集まって座談会をした記録が一冊の本になっているものがあります。村の話、闘争の話、農業の話を語り合っている中で、土の話が出てきます。「おれたちはなんで、農地死守、とかいってこんなに闘っているんだろう」、「地域も、家族もばらばらになって、おれたちは一体なんのためにやっているんだ」という話になった。そこで石井さんは、「土地じゃないよな」と言うんです。

空港公団や政府、運輸省は、これだけの値段で、「土地」をよこせ、と言う。その土地と言うのは、「面積」なんですね。「おれたちが今守ろうと言っているのは面積じゃないよな」と話して、「土だろう」という言葉が出てくる。「１へ